[特集]

障害というハンデはあっても、
こんなことをしてみたい、
あんなことにもチャレンジしてみたい。
そうした夢をかなえるためには、
どういった訓練をすればいいのだろう。
どんな支援施設があるのだろう。
そして、そこでの訓練とはどんな
ものなのだろうか。
そんな障害者の自立を支援する
施設についてレポートしてみました。

自立への志とともに

～障害者の自立支援と活躍の場～

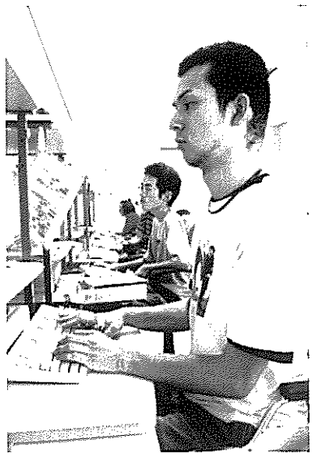
ハートピアかごしま「身体障害者自立支援センター」

入所あるいは通所で1年間訓練

「身体障害者自立支援センター」があるハートピアかごしま

障害者福祉の中核施設ハートピアかごしま。ここには大きく分けると、身体障害者更生相談所、身体障害者自立支援センター、視聴覚障害者情報センター、障害者自立交流センターの4つの施設があります。この中で、障害者の自立を支援する施設が身体障害者自立支援センター。入所（通所を含む）者を対象に機能回復訓練や職能訓練等を行っています。

入所は随時できます。入所期間は原則として1年以内（自動車運転の訓練の場合は9か月間）。入所の資格は、"市町村から施設受給者証の交付を受けている人で、肢体不自由を主たる障害とする人"です。



自分のペースに合わせてパソコンが学べる

VOL.8 2004
福祉のまちづくり広報誌
ありば

CONTENTS

表紙の絵本 「のぎく文庫ー布の絵本ー」
あかずきん　子どもたちの大好きなグリム童話のお話です。木や草、いすなどが面ファスナーになっているので、くっつけたり、はがしたりしながら、登場人物を動かしてお話を進めます。

[特集] 自立への志とともに
～障害者の自立支援と活躍の場～ PAGE 1

ありば ヒューマンドキュメント
有屋田 智香さん PAGE 4

ありば通心 PAGE 6
普及と改良が進む人工内耳

バリアフリー最前線 PAGE 7
肥薩おれんじ鉄道（肥薩おれんじ鉄道株式会社）
犬迫駐在所（鹿児島市犬迫町）

ハードルを越えて PAGE 8
加治佐 博昭さん

ありば掲示板 PAGE 9
「友愛フェスティバル」開催！

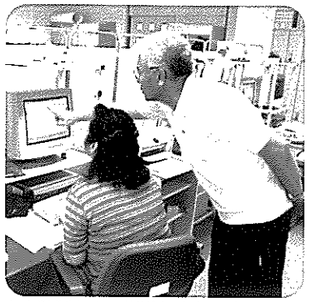
鹿児島県からのお知らせ

表紙の絵本―のぎく文庫プロフィール

夢がひろがる布の絵本作りに取組む鹿児島市の主婦のボランティアグループ「のぎく文庫」は障害を持った子供たちにも絵本の楽しさを知ってもらおうと昭和56年に誕生。以後、毎月一回メンバーが県社会福祉センターに集まり、布を使った絵本作りを行う。ボタン、ファスナー、マジックテープなどを使い、取り外したり貼り付けたり、ふつうの絵本にはない工夫がされている。

全コースを体験訓練できる

では、この身体障害者自立支援センターでは、どういう訓練が行われているのかを見てみましょう。訓練は大きく分けると3つです。1つは機能回復訓練、2つめは職能訓練、そして3つめが生活訓練です。機能回復訓練は理学療法、作業療法、言語療法によって、身体および言語の機能回復をめざしています。職能訓練には洋裁・手芸コース、軽作業コース、パソコンAコース、パソコンBコースの4つの科と、自動車運転科があります。パソコンのAコースは基礎的な内容で、Bコースは応用編です。さらに生活訓練のカリキュラムとして一般教養講座、クラブ活動、社会生活適応訓練、避難訓練、カウンセリング、交通安全教室などが組まれています。職能訓練は、入所したら5日間ほどかけて洋裁・手芸、軽作業、パソコンの3つのコースをそれぞれ体験します。その後、本人の希望や適性を踏まえ職能処遇検討会でコースが決定されます。職能コースが決まりますと、各人毎に個別支援計画が作成され、本人の同意を得て、支援がスタートします。


少人数制なので指導もゆきとどいている

自分のペースに合わせてのびのびと

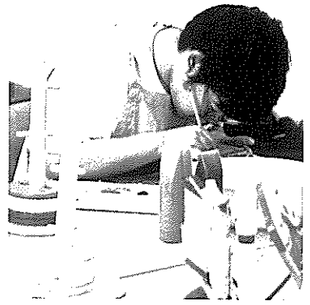
パソコンのAコースでは、パソコンはまるっきり初めてという人や学校でちょっとだけ触ったという人などさまざまな人が訓練を受けています。4ヶ月で基礎的なことをマスターすればBコースへ。Bコースではワード、エクセルによる実務的な作業、プレゼンテーションソフトを使った専門的な分野の訓練が行われます。全員が同じテキストで学ぶのではなく、個人個人の興味ある分野でその進ちょく度に合わせたカリキュラムが組んであるので、自分のペースで技術が習得できます。

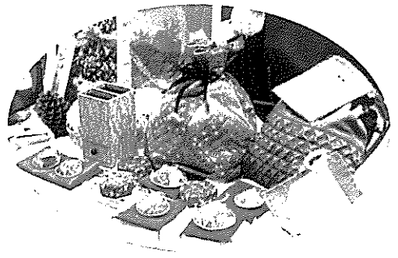
実際にパソコンのAコースで学んでいる人のひとりは、「平成11年に下肢の障害で退職し、事務職をさがしていましたが、パソコンの入力ができないと再就職はなかなかむずかしいと言われまして、こちらへ通って訓練を受けています。今は、事務職でもワード、エクセルといったソフトを操作できるのが採用の条件になってきますので、なんとかマスターしたいですね。」と語ってくれました。

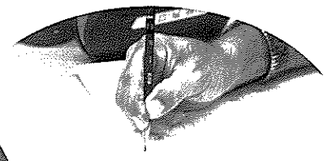
就職につなげるために

機能回復訓練や生活訓練によって家庭や社会へ復帰したり、職能訓練によって身に付けた技術を仕事の現場に活かしてもらうことが本センターの目的。昨年度は12名が家庭復帰、1名が就職、4名が授産施設へ入所、さらに4名が専門的な訓練を行う職業能力開発校へ進学しました。就職が厳しい現実の中、「技能を身に付けて1年間遠ざかってしまうとゼロになり、学んだ意味がなくなります。ですから、できるかぎりの支援を惜しみません。」と同センターの指導員。障害者といっしょになってのチャレンジが続きます。

それぞれに自分の興味のある分野を選ぶことができる

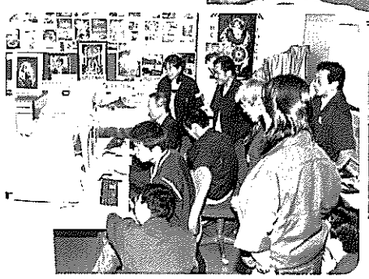

木工、陶芸などを学ぶ　軽作業コース


洋裁・手芸コースの受講者が作った作品


生活訓練のひとつである硬筆講座

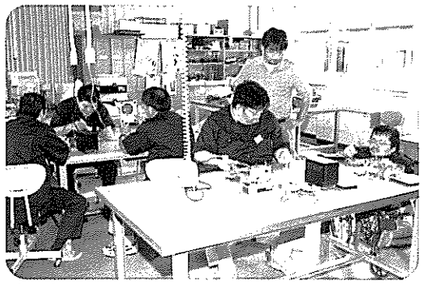
鹿児島障害者職業能力開発校

細かいところまで丹念に。　義肢・装具科


実際の印刷物ができるまでを学ぶ
製版・印刷科

充実した環境で技術を学ぶ

入来町にある鹿児島障害者職業能力開発校は、障害のある方々に、様々な職種についての知識や専門的な技術・技能を習得してもらうために、職業能力開発促進法に基づいて国が設置し、県が委託を受けて運営する職業能力開発施設です。全国に19校あり、鹿児島校は昭和43年に設立されました。


プログラミングから実際の製作まで行う
電子制御システム科

職業に就いて自立したいと思っている障害のある方々にとって、パソコンを活用する知識や能力をはじめ様々な専門的技術・技能が求められることが多くなっています。ここでは、そんな能力を身に付けたい方々に対し様々な訓練科目を用意しています。

訓練科目は普通課程と短期課程に分かれ、普通課程には製版・印刷科、義肢・装具科、経理事務科、情報ビジネス科、電子制御システム科の5つの科目があり、短期課程は総合実務科（知的障害者対象）、洋裁科、園芸科の3つの科目があります。

訓練期間は1年間。通学はもちろん寮も完備しており、県内外から多くの訓練生が学んでいます。

より専門的な訓練で、高い就職率

実際に訓練内容を見てみますと、例えば製版・印刷科では年間1406時間があてられています。1406時間の中には、印刷・製本・デザイン・生産工学概論からOA機器の操作基本実習、印刷物の製作実習など、業務の基礎的な知識と専門的な内容を実際の作業をとおして身に付けていけるようなカリキュラムが組まれています。

製版・印刷科、義肢・装具科、経理事務科、情報ビジネス科、電子制御システム科は、技能照査試験に合格して修了すると技能士補という資格が得られます。この資格があると、二級技能検定受験の際に学科試験が免除になります。

意欲ある訓練生のチャレンジの成果は、就職退校者を含め、60％という高い就職率に現れています。

自立への志とともに ～障害者の自立支援と活躍の場～

ありば ヒューマンドキュメント

ただ足が不自由なだけ、
あとは、
みんなと同じです。

[有屋田（ありやだ） 智香（ちか）さん]

「NHKハート展」で2年連続入選

「NHKハート展」という詩とアートを合体させた展覧会がある。障害のある人が日常生活の中で感じたことを一編の詩につづり、さまざまな分野で活躍するアーティストや著名人が、その詩からイメージされる「ハート」をモチーフに表現する。このハート展で平成14年、15年と連続入選した有屋田智香さん。有屋田さんは鹿児島国際大学の4年生で社会福祉を専攻している。「入選の通知を受取った時、エッ、そんな展覧会に応募していたっけ?という感じで、自分でもびっくりしました」と有屋田さん。インターネットで調べものをしていた時にリンクページをたどっていったら、たまたまハート展の募集ページを発見、下書きもせずにメールで応募したとか。そして、昨年は「2回目だから真剣に考えて書こう」と言葉をつむぎ出した。

歩けないことが辛いんじゃない。
車いすをこいでもこいでも
みんなの足並みに
ついていくことができなさそうで。
立てないことが辛いんじゃない。
私の目線が
みんなの視界に入らずに、
一人ぼっちにされそうで。

足が不自由なことが嫌なんじゃない。
何かに躓いた時、
その言い訳を
全て足のせいにしてしまいそうで。
でも、言えない。
言ってしまうと
自分がますます弱くなってしまいそうで。

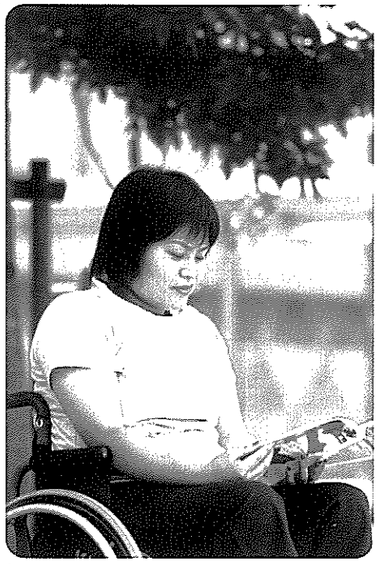
『言えないホンネ』と題された入選作、人気イラストレーターのリリー・フランキーさんの絵が添えられた。「国語はもともと好きでしたが、詩を書き出したのは、リハビリを受けていた病院のソーシャルワーカーにすすめられてからです。言葉にすると、自分を客観的に見ることができるんです」。詩は自分が好きな時に書いて、集中して書いたかと思うと、1～2週間白紙のままだったり波がある。読む方は、小説よりもノンフィクションやエッセイなど実生活に関連のある分野が好きという。

2年連続で入選した作品集

障害をもっているのは自分だけじゃない

有屋田さんは、高校1年の秋に事故に遭い、脊髄損傷のため鹿児島市内の病院に入院した。その後、リハビリのために水俣の湯之児の病院へ転院。転院先のベッドで、「歩けるようになりますか?」と恐る恐るたずねると、「無理ですね」のひとこと。「ちょうど研修中のお医者さんで、もう少し上手な告知手段があっても良かったんでしょうけど・・・」ショックだった。鹿児島の病院ではリハビリ次第では歩けるようになると聞かされていただけに、裏切られたという思いもつのった。何週間かご飯を食べず、リハビリにも行かなかった。担当の先生は「リハビリをしたくないなら来るな。自分がどうなりたいのか考えて来い」と厳しく言い放った。有屋田さんは危機感に襲われた。そして、まわりを見まわすと、自分より症状の重い患者さんがいっぱいいた。障害をもっているのは自分だけじゃないんだ。「悔しかったけれど、その頃は人の手を借りないと車いすに乗れなかったし、いろんなことで壁にぶちあたっていましたね」。病院の先生はじめスタッフに励まされ、自分に何ができるかがわかってきた。転院して2ヶ月が過ぎていた。1年後に退院し、通信制の高校で学び、鹿児島国際大学の学生となった。

キャンパス内は車いすで移動



ソーシャルワーカーへの夢がふくらむ

**ご恩に対して何が返せるだろうか。
まずは同じ目線に立つことから。**

車いすの目線で福祉の現場で役立ちたい

「私は、ただ足が不自由なだけで、みんなと同じなんです。でも、ハンデが一つあるだけで、すべてが障害者と見られて門前払いされることも。障害という名で、可能性をつぶされることがあってはならないと思うのです」。有屋田さんは、寮住まいだが炊事も洗濯も自分でこなすし、車を運転してどこへでも出かける。車いすバスケットや車いすテニスの同好会に入ってコートを走りまわる。「バスケットの試合をするためには最低10人が必要なのに、人を集めるのが大変。『バスケやっているけど来ない?』って気軽に声をかけられる障害者がいないんです」。いつも会う障害者がいっしょ。同じ町に住んでいるのに、障害者どうしがふれあえる機会が少ない。もっと障害者が出てきやすい環境づくりの大切さを有屋田さんは訴える。また、日本の福祉の現状についても、施設の数の少なさ、働きたくても働く場が少ない雇用の問題などを指摘する。「あなたの将来の夢は何ですか?」とたずねると、「入院中、ソーシャルワーカーの先生から受けたご恩に報いたいですね。ですから、健常者として生きて来た中での価値観と、途中から障害者となった経験を活かし、車いすの目線から社会福祉の現場で役に立ちたい。ソーシャルワーカーになるのが夢ですね。」と語ってくれた。